



隣の国の人々と出会う

斎藤真理子／著
創元社 2024.8

韓国文学の翻訳者が、韓国語（朝鮮語）の魅力や言葉の背後にある日韓の歴史を語ります。二つの言語のあいだに立つことで見えるものとは。



「イスラエル人」の世界観

大治朋子／著
毎日新聞出版 2025.6

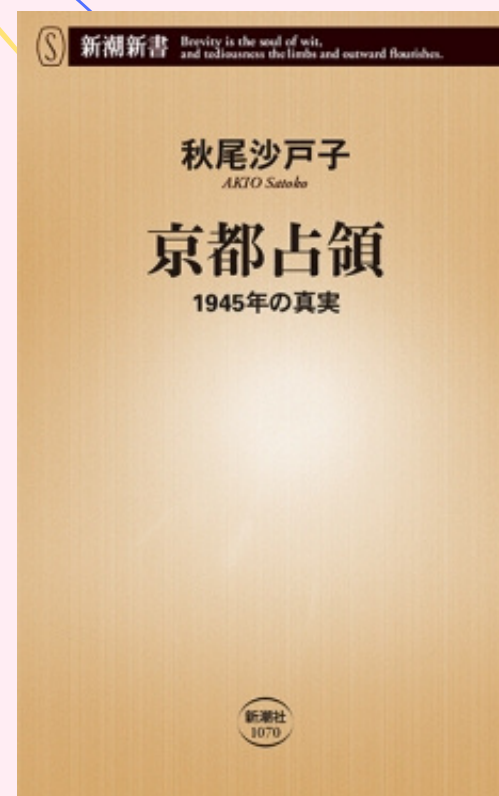
2023年10月7日に始まったイスラム組織ハマスによるパレスチナ自治区ガザ地区への攻撃により、多くの犠牲が続いています。戦時下で変わりつつあるイスラエルの人々の自己認識や世界観とは。



「透明」になんかされるものか

鷺田清一／著
朝日出版社 2025.5

「初めから視野から外されているというのは、そしてそんなじぶんが死んでもだれにも気づかれず、だれ一人悲しむ人もいないというのは、自分が砂漠の砂の一粒に成り果てたということだ。」多様性、寛容、パンデミックなどをテーマにした、京都出身哲学者のエッセイ集。



京都占領

秋尾沙戸子／著
新潮社 2024.12

大礼記念京都美術館（現：京セラ美術館）は米軍病院に、公会堂（現：ロームシアター京都）は宿舍に、植物園は米軍家族の住宅地に、四条烏丸の大建ビル（現：COCON KARASUMA）は司令部に――。戦後、GHQ占領下の京都に起きた変化とは。日米双方の資料をもとに紐解きます。

ともにいきる

CONNECT⇄

障害のある人もない人も、多様性や共生社会についてともに考える17日間
共生社会をテーマに、「ともにいきる」社会のヒントになる本を集めました



スクリーンのなかの障害
塙幸枝／著
フィルムアート社 2024.11

映画の中で障害はどのように描かれて来たのか。
また、今日の映画は障害をいかに描くようになったのか。
作品名を挙げながら、障害をめぐる描写や演じることについて考察します。

庭に埋めたものは
掘り起こさなければならない
齋藤美衣／著
医学書院 2024.1

自身の抱える摂食障害、自閉スペクトラム症、
白血病、「さみしい」や「死にたい」に向き合い、
回復に向かう記録です。



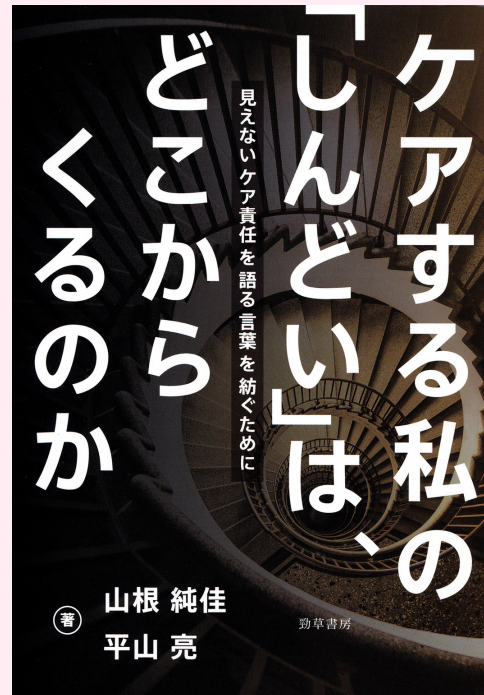
女の子の背骨
市川沙央／著
文藝春秋 2025.9

「あの拳銃を盗んで何でもいいから何かを撃ち殺したい。」
筋肉の難病を患う主人公と、同じ病気の姉との関係を描きます。
芥川賞受賞作『ハンチバック』の著者による短編。



ユニバーサル・ミュージアムから人類の未来へ
広瀬浩二郎／著 雄山閣 2025.9

全盲の文化人類学者が、「目に見えないもの」をキーワードに、
実感・情感・体感を探ります。
さわる、聞く、感じる…… 博物館を通じて「世界をみる」ための
様々な手法を紹介。



ケアする私の「しんどい」は、どこからくるのか
山根純佳／著
勁草書房 2025.6

長く女性たちが負ってきた家庭内での「名もなきケア責任」に注目し、
ケアをめぐるジェンダー不均衡に迫ります。

ケアと編集
白石正明／著
岩波書店 2025.4

医学書院「ケアをひらく」シリーズの編集者が贈る啓発書。
弱さは克服・治療すべきものではなく、
その人の持つ「傾き」として受け止めます。



私たちに
名刺がないだけで
仕事してこなかった
わけじゃない



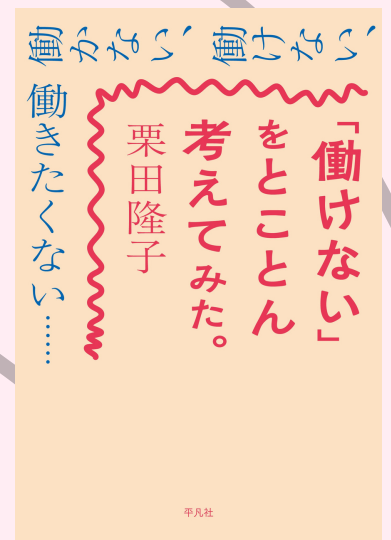
韓国、女性たちの
労働生活史
京郷新聞ジェンダー企画班＝著
すんみ、尹怡景＝訳

私たちに名刺がないだけで
仕事してこなかったわけじゃない
京郷新聞ジェンダー企画班／著 大和書房 2025.7

韓国シニア女性たちへのインタビュー集。
長年、家庭の中心となって家業や家族のケアに努めながらも、
その労働は「仕事」とみなされず、名刺も地位も賃金を得られなかった
女性たちの声に耳を傾けます。

「働けない」をとことん考えてみた。
栗田隆子／著 平凡社 2025.2

非正規雇用、病気、障害、ケアワーク……。
「普通」に働けない人たちへ向けられる「ズルい」や「怠けている」といった視線は
どこから来るのか。労働をめぐる「普通」を見つめ直す1冊です。



京都出町のエスノグラフィ

有馬恵子／著
青土社 2025.7

出町商店街を舞台に、人と店、
ひいては地域とのかかわりに注目します。
「ミセノマ」が生活にもたらすものとは。



遊びと利他

北村匡平／著
集英社 2024.11

私たちの生活からは「偶然性」が
消えつつある、と筆者は警鐘を鳴らします。
人との出会いや娯楽までもが目的のために効率化され、
子供の遊び場すらも例外ではありません。
効率化や管理化とは対極にある遊びの空間に注目し、
発生する「利他」を観察します。

分断された世界をつなぐ思想

山脇直司／著
北海道大学出版会 2024.4

「公共哲学」と「共生思想」をキーワードに、
よりよい社会の在り方を探ります。



すき間の哲学

村上靖彦／著

ミネルヴァ書房 2024.7

著者は大阪市西成区での経験から、
社会制度の「すき間」に落ちてしまった人たちへ目を向けます。
発されるかすかなSOSを見つめ、すき間を生まない社会の作り方を
問いかけます。

自分のあたりまえを切り崩す文化人類学入門

箕曲在弘／著 大和書房 2024.12

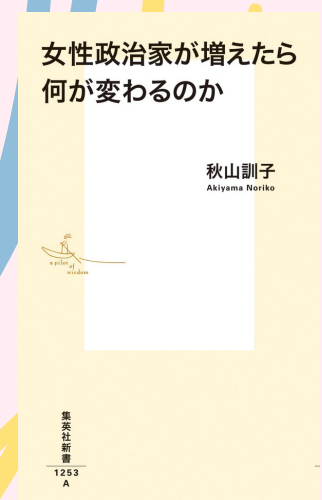
人はなぜよそ者に冷たいのか？
なぜプレゼントをもらったらお返しをするのか？
なぜ就活はつらいのか？
文化人類学という手法で、日常の「あたりまえ」を問い直す1冊です。



女性政治家が増えたら何が変わるのか

秋山訓子／著 集英社 2025.3

2023年の統一地方選挙で若い世代や女性の投票率が
上昇した東京都杉並区を筆頭に、全国各地で、
女性の政治家が増えつつあります。
女性政治家が増えることで地方に起きた変化とは。



ひとりもとりこぼさない学校へ

志水宏吉／編

岩波書店 2025.2

貧困、部落出身、障害、海外ルーツといった、マイノリティ集団に属する
高校生の声を聞き、学校教育について考えます。



能力主義をケアでほぐす

竹端寛／著

晶文社 2025.2

自分成果主義・自己責任論に傾倒していた仕事中心の日々から一変、子育てを通して「ケア」の重要性に気付いた著者。ケアを起点に出会った人や本とのエピソード集。

ビジネスと人権

伊藤和子／著 岩波書店 2025.2

企業が利潤を追求した結果、長時間労働や環境汚染といった問題が山積し、2011年には国連で「ビジネスと人権に関する指導原則」が採択されました。日本も例外ではありません。企業が直面する課題とは。



研究者、生活を語る

岩波書店編集部／編
岩波書店 2024.1

研究者としてのキャリアと、家族のケアをどう両立させるか。育児や介護を担いながら働く、決して「キラキラ」ではない27名の経験談。

あなたが私を竹槍で突き殺す前に

李龍徳／著

河出書房新社 2020.3

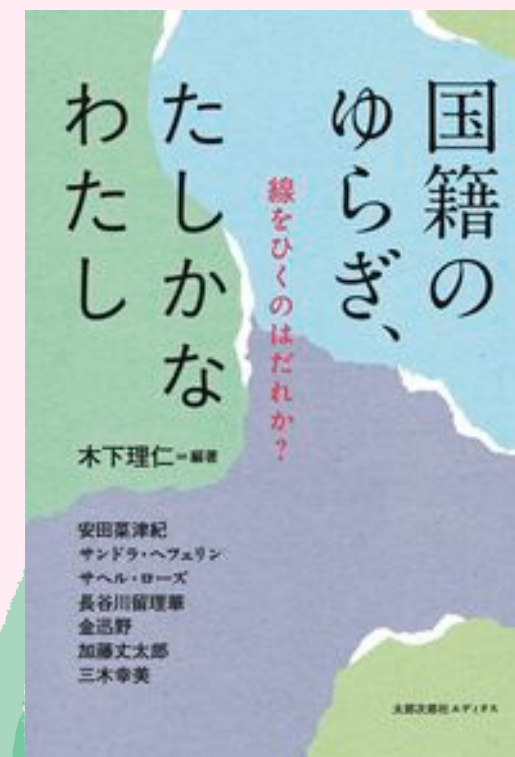
「排外主義者たちの夢は叶った。」
衝撃的な書き出しから始まる小説です。
ヘイトクライムが横行する社会で立ち上がった
7人の若者たちの物語。



移民・難民たちの新世界地図

村山祐介／著
新潮社 2024.7

ウクライナ侵攻前後の2021-2024年にかけて、
命がけで旅する難民たちの1000日の記録。



国籍のゆらぎ、たしかなわたし

木下理仁／編著
太郎次郎社エディタス 2025.6

在日コリアンであることを娘に隠し通した父親、「ハーフ」に向けられる視線、子どもの頃に「無国籍」となった難民の女性など、海外にルーツを持つ7人との対話を通して「国籍」という「線引き」について考えます。